小さなお尻の義母と短期間の永久地獄の旅　終わらない夜の街

リビングの床にはヘアスプレーとこぼれた香水の小さなビンが二つ、そして脱ぎ捨てられたストッキングがしわくちゃになって置かれていた。

・・・・・・・・・・・・・・・。

義母はリビングでソファに座り、きびきびととっても張り切った様子で濃い目のグレーのＴシャツに着替えた。

夏場・・・・薄めのトレーナーにはほんの少しだけ汗が滲み、胸元は大きく膨ら

んでいる。

自宅すぐ近くの職場。帰って制服から着替え・・・・・ハダカになる。準備は万端である。

ぽっこり胸元。義母はシャワールームに入った。

太ももを水シャワー。バスタオルと髪が濡れる・・・・・・・・。

・・・・その下着はそれは毎晩ベッドの上で夢中で舐められていることを物語っている。

自宅近くの職場の制服はいつも肌に密着。そしてジーンズのポケットは‥‥。

お尻は小さく・・・・・・。

だけど最近は舐められすぎて・・・・・。

そんなまつ毛の濃い義母と俺は、

いつの間にかこんな時代に到着した。

そして・・・・・・・永久地獄の旅が突如はじまる。

何事もない忙しない日常の一区間。突如リビングと台所の間くらいの位置に時空の扉が生じたのだ。

週刊のマンガ本が並べられているリビング隅の低めの棚の上あたりである。時空のような暗い異空間が生じた・・・・・・。

下着の義母は驚いて立ち上がる。

興味本位で吸い込まれるようにそこへ入っていく。義母は俺の手を引いた。

・・・・・だけど、

・・・・・・・もともと下着で太ももの義母がいたリビングの南側の窓・・・・その向こうも、

とんでもない状況であったのである。

電信柱と雲の中間・・・・・・時代は元々ホラー映画のよう。

時空の扉に入ると、廃れたようなトンネル。もちろんその場所もホラー映画に出てきそうな人通りのない場所。

しかしいくつもの恐怖が交錯した、そんな状況から義母の下着の横紐と腰部を引っ張って足を踏み入れたという形。

コンクリートが腐り顔を出した天井の土から滴り落ちる水が車道のアスファルト路面ラインが消えるほどに大量にしたたり落ちている。

義母はパイパンだった。

短時間で帰って来れる・・・・・・。キャミソールの義母をギュッと抱きしめる。

（体験版は以上になります。ご読了ありがとうございました）